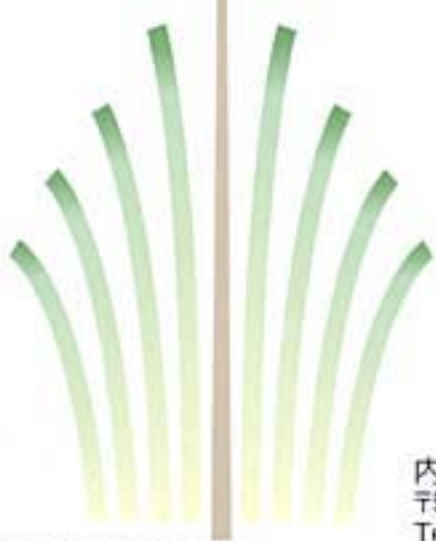


くすり博物館だより

VOL. 50

平成15年(2003)10月

NAITO MUSEUM OF PHARMACEUTICAL SCIENCE AND INDUSTRY



内藤記念くすり博物館
〒501-6195 岐阜県羽島郡川島町竹早町1
Tel:(0586)89-2101 Fax:(0586)89-2197

企画展 くすりの広告文化 —看板・錦絵広告・ポスターの世界— 2003年4月27日～11月30日

テーマ特集◆看板と錦絵広告



宝丹[建看板]
守田治兵衛/高野万太郎/[東京]・[山形]/明治/106×60
宝丹は東京・池之端の薬。現存する建看板は少ない。

袋看板 大和屋久兵衛/
岐阜/江戸/95×60×30
薬袋をかたどった看板。



看板をかかげる

薬屋の看板には、屋根看板・建看板のように店の建物や屋外に設置する大がかりなものもあれば、屋内・屋外の壁にとりつける掛看板、衝立のように用いる置看板など、さまざまな種類があります。現在のポスターにあたる紙看板もありました。

「看板娘」「看板をおろす」という表現があるように、商売人にとって看板は商売のシンボルでした。そのため、ぜいたくな、あるいは工夫をこらした看板が作られました。しかし、商人階級は経済力がありながら、武士階級より下位に甘んじなければならず、看板は自分たちの存在をアピールする意味もあったかもしれません。

看板は、平城京・平安京の市で用いられた勝が始まりといわれています。薬の看板では、袋看板が古くから用いられていたようで、桃山時代の「洛中洛外図屏風」にも描かれています。これは、袋の形が薬袋を表し、さらに文字で「薬種」と書かれていますので、ちょうど品物の形をかたどった絵看板と文字看板の中間の形態といえるでしょう。看板類が本格的に作られるようになるのは、江戸時代に都市や町が整備されてからです。また、文字の看板が多くなるのは、読み書きそろばんの普及にともなっていることなのでしょう。

ちらしなどの広告類の普及は、江戸時代に庶民が印刷物を手にすることができるようになってからのことです。印刷技術が進歩すると、墨一色摺りのちらしだけでなく、錦絵広告と呼ばれる多色摺りの広告も作られるようになりました。

このような広告がどのようなルートで配布されていたかはくわしくわかってはいませんが、年賀のあいさつや訪問した折に得意先へ渡したり、逆に得意先を開拓するために用いたのではないかとされています。ちらしは現在と同じように戸別にあるいは街頭で配布されたり、行商の折に渡されたりして、おおいに活用されました。

制作には費用がかかることから、逆に多くの錦絵広告を生み出した当時の薬業界は、潤沢な資金があったといえるでしょう。文化的側面から見れば、江戸時代の広告業界において、薬屋は錦絵やその他の広告文化を育てる一端を担っていたのかもしれない。



廻応散[うちわ絵広告] 佐野盛林堂/東京/明治/21.5×23.5
広告入りのうちわは、夏にお得意様へ配られた。建看板や掛看板などが飾られた立派な店構えが描かれている。

■資料の説明は、
資料名[種類] 薬の製造元/販売元/製造元の所在地・販売元の所在地/年代/サイズの順に記載しました。データのなところは省略しました。
■サイズの単位は cm です。

立派な店構え

立派な看板を掲げた店は、道行く人の注目を集めただけでなく、錦絵広告にも描かれました。初めて来店する方でも、店の様子を描いた錦絵広告を持っていれば店を探すよい手がかりになったことでしょう。また、美しい色刷りの絵は、大切に保管されたり、何度も見返したり、知り合いに見せたり、と広告効果が高かったといえます。

このように、看板や錦絵広告は、単独で用いられるだけでなく、組み合わせられて宣伝効果をあげたということができるといえます。

升屋開店披露
升屋助吉／秋田／明治／
51.5×37.2

西洋風のテラスのある建物に屋根看板がつけられている。また、店の前は、西洋風の服装をした人々や人力車が行き交い、店の奥には薬びんがずらりと並ぶ。その一方で、昔ながらの百味筆筒や製薬道具も見られる。江戸から明治への薬屋の移り変わりがよくえがかれた錦絵広告。



桃花散・百中膏
川杉忠七／資善堂／
京都／23×35

実業家・岸田吟香は自分の店の目薬・精鏡水の瓶を身体にした姿で描かれている。その背中に背負われた百中膏は貝殻の容器に入った練り薬であるが、女の子の姿をしており、ケガをした大工に薬を差し出している。よく見ないと絵の意味がわからないが、インパクトのあるデザインである。

何を美しいと思うか、面白いと思うかは時代によって移り変わっていくものです。江戸時代には“粋”と呼ばれる独特の文化がありましたが、明治時代になると、新しい美しさや面白さが求められるようになりました。また、思わず手に取ってみたいくなるように、挿し絵や文章が工夫されました。

また、ちらしが普及すると、他の店のちらしより目立たせるために、形や大きさにも工夫をこらしました。

読んでもらうために

次亜燐
小西久兵衛／大阪／
19.9×25.6
商品の瓶の形をしたちらし。裏表にびっしりと広告文が書かれているが、まず形の面白さにこのちらしを手にする人は多かったことと思われる。



アヲバ錠
境養寿堂／宮城／24.6×34.5
左側の空欄に、後で店名などを入れられる「名入れ印刷」タイプの広告。どんな業種でも対応できるように、美人画や風景画など万人向けのデザインが用いられた。

笑顔にひかれて

明治時代には衛生教育が行われ、医薬のイメージとして「病院」や「医療器具」などの近代的な図柄が用いられるようになりました。しかしその一方で、「看護婦さん」や「お母さん」の絵柄が広告に描かれたのは、安心感や親しみやすさを表現しようとしたからでしょう。

また、明治20～30年代の紙巻煙草のポスターやパッケージデザインの影響で、薬の広告にも美人画が多く見られるようになりました。



日本製薬
日本製薬／香川／38.1×28.8
女性の絵姿に社名が入れられたポスター。当館では同種のポスター計3点を収蔵しており、シリーズで製作されたものと思われる。

身近なところに



キンピシ[ちらし]
キンピシ薬行/津江田
薬店/広島/大正-昭
和/24.7×34.5
取り扱っている薬を紹
介したちらしであるが、
周囲の食べ合わせの情
報の方が目立っている。
欄外には新聞記事が引
用されたり、茶の間や台
所の目立つところにこ
のちらしを張るようと
書かれている。

広告以外の役に立つ情報を掲載するの、広告を長く手元に保存してもらうための有効な手段です。食べ合わせや暦・金言などの便利な情報が広告に用いられました。中には逆に、双六や野球ゲームなどの玩具に広告が入っているものもあり、これはこどもと遊びながら大人に製品名やメーカー名を覚えてもらうためのものですが、こどもには無料でもらえるおまけとして大変人気がありました。



石黒薬館
石黒薬館/愛知/25.0×38.0
郵便代金の一覧表が掲載されているちらし。郵便配達の絵も描かれている。反故紙で裏打ちされており、大切に使用されていたことがわかる。

わかもと新案出世競争
双六[販促品]
わかもと本舗栄養と育
児の会/東京/昭和11
年(1936)/54.3×79.2
学校を卒業してから実
業家や外交官など憧れ
の職業になるまでの双
六。わかもと本舗はこ
のほかに各種の双六や
罫子などを作成した。



さまざまな行商人

昔は薬は店だけでなく、行商人によっても販売されていました。富山の配置売薬の行商人のように受け持ち区域のお得意さんを回る行商人もあれば、定賣売りや枇杷葉湯売りのように、市街を売り歩く行商人もありました。



[明治商売絵]左よりぜさい売り・熊の油売り・赤蛙売り・そげ抜き売り・千金丹売り・もぐさ売り 明治/22×15

おくすり今昔

—手さげ袋で薬の配達—

京都におすまいの医事評論家・京極三郎先生より、企画展図録に掲載されている手さげ袋についてお教えいただきました。

先生によれば、この袋は、明治～昭和初期にかけて、薬屋さんが500ccの瓶入りの薬品を配達するのに使われたものとのことです。自転車が普及すると、店の丁稚さんがこの袋に薬瓶を入れ、自転車のハンドルにさげて配達しました。丈夫なズック製で、雨の日は目がつまるので中に水が染み込まず、逆に中で瓶が割れても、液体が外にもれにくかったそうです。当時は薬のメーカーは製品名やメーカー名を入れた袋を配りまし

た。集金の時にもこの袋を使いましたので、盗難されないようにひもで閉じる型やふた付のものも用いられました。

昔は酒屋さんが一升瓶を配達するときにもズック製の袋が使われましたが、現在では薬もお酒も箱やプラスチックのケースに入られて配達され、袋はほとんど使われなくなりました。ものは使われなければ、どんな目的でどのようにして使用されたか、よくわからなくなってきます。くすり博物館でも、資料の収集と同時に、そのものについてのさまざまな情報を集めています。

学芸員 稲垣裕美

手さげ袋
鎮火五竜円=浮田/大阪/昭和20年以前/
22.0×26.4×14.2
アストイン=昭和20年以前/26.0×18.5×10.5
ヘデクパウダー=昭和20年以前/25.5×17.5×11.8



冬でも楽しめる花 ローズマリー

冬は、一年で最も花が少ない寂しさを感じる季節です。そんな中、当薬草園でも一際目立つ青紫色の鮮やかな小さな花をたくさん咲かせているローズマリーがあります。

ローズマリーは、別名をマンネンロウといい、ヨーロッパ地中海沿岸地方原産のシソ科の常緑小低木で、丈は60～120cm程になります。本来は、温暖で乾燥した所を好みますが、関東地方以西であれば育つとされます。

学名の“Rosmarinus”はラテン語のros(露)とmarinus(海の)に由来し、海岸に面した崖などに多く繁茂していたことからこの名がついたとされます。また一方では、この木の花はもともと白かったが、聖母マリアが衣を干したところ青く染まったので、「聖母マリアのバラ」という意味である

という言い伝えもあります。

ローズマリーの利用方法は様々で、その芳香性から葉を肉、野菜料理、ウースターソースなどの香り付けに利用する他、新緑時に葉を触るとべとつく程の油は迷迭香油(めいてっこうゆ)とよばれ、香料やセッケンなどの材料とします。また、薬草としても鎮痛、発汗、健胃、口臭予防などの作用があるとされ、枝ごとお風呂に入れると、疲れをとるハーブバスにもなります。古代ギリシャ時代にはこのローズマリーが、頭脳を明晰(めいせき)にし、記憶力を増す働きがあると信じられ、古代ギリシャの学者たちは記憶力を高めるために、この小枝を髪にさしたと伝えられています。

さて、このようなローズマリーですが、木立性(枝がまっすぐのびる)、半ほふく性(枝がやや横に伸びる)、ほふく性(枝が、は

うか垂れ下がる)とその形も様々で、開花期間も長いことから、庭の彩りとして植えてみてはいかがでしょう。種子からの発芽率も悪く、時間もかかるため、挿し木やとり木(枝の一部を傷つけ針金で固定し地中に埋める)から始めるのがおすすめです。

薬用植物園 亀谷芳明



とびっくす



◆企画展のゲームコーナーが大人気!

広告の展示にちなんで、広告入りの資料をゲームにしました。資料の野球盤は紙に印刷されたものですが、これを複製してパットとボールで遊べるようにしました。人参三臓円の広告をジグソーパズルとしたほか、薬屋さんの販促品を参考にしたルーレットゲームもあり、皆さん楽しんでいただいています。

◆企画展の一部展示替えを行いました

8月にポスターと錦絵広告を中心に一部展示替えを行い、27点を新たに展示いたしました。企画展図録には掲載されていませんが、エーザイのユベロンのポスターも2点展示しました。これは故・石原裕次郎さんが若い頃のポスターです。ぜひご覧ください。

◆一宮七タウォーク

7月29日に一宮の138タワーパークを出発された約800名のウォーク参加者が来館されました。くすり博物館がゴールのコースと、さらに犬山まで歩くコースがありましたが、皆さん元気よく歩かれていました。晴天で暑かったため、用意した冷たい水とウコン茶が好評でした。

『秋のリース教室』参加者募集

薬用植物園では、内藤記念くすり博物館では「秋のリース作り教室」を開催します。薬用植物園で採取したハーブの実・葉・花・葉などを使ってリース作りを体験する講座です。参加者を募集しています。詳しくは受付でおたずねください。

●日時：2003年11月29日(土)・30日(日) 午前10時～12時

●定員：各日30名(高校生以上) ●参加費：500円

●締切：11月9日(日)必着(※申込多数の場合は抽選)

●申し込み：往復ハガキに「秋のリース教室参加希望」と記載し、参加者全員の「氏名・住所(郵便番号も)・年齢・電話番号・参加希望日」を明記して、内藤記念くすり博物館までお送りください。

新収蔵資料を紹介しします

◆明治時代の往診用薬箱

岐阜県洞戸村(現・山県市)の松戸彰様より、ご先祖のお医者様が使用されていた往診用薬箱4点など貴重な資料をいただきました。中身が当時のまま残されている薬箱もあり、昔使われていた薬がよくわかります。



◆薬局の販促品

滋賀県・ゆかり薬局様より、企画展にちなんで昭和から最近までの販促品をご寄贈いただきました。

◆◆資料・図書ご提供者ご芳名◆◆

岩下哲典 上村仁志 太田正弘
古井倫士 河野亨
小太郎漢方製薬(株) 斎藤文雄
桜井謙介 青雲堂 辻 敦敏
永井良樹 長野仁 横佐知子
松浦薬業(株)
森ノ宮医療学園専門学校 森 栄

～ありがとうございました～
(敬称略/五十音順)

内藤記念くすり博物館

開館/9:00～16:00

休館/月曜日

年末年始(12/28～1/8)

館長 篠田愛信

学芸員 稲垣裕美(編集担当)

学芸員・司書

野尻佳与子 伊藤恭子

庶務 森田麻起子 小田明子

小島敦子(見学受付)

林知子(図書整理)

薬用植物園(栽培管理)

丸谷辰行 栗本裕康 亀谷芳明

顧問 青木允夫

アドバイザー 逸見誠三郎

HP「くすりの博物館」へどうぞ

今年の夏休みには「楽しい自由研究」と題したページを開設し、小中学生の皆さんの宿題に少しは役立てたのではないかと思います。

引き続き、企画展を楽しく紹介したページと、薬の研究開発をわかりやすく解説したページが始まります。コラムは毎週金曜日に更新です。週末にはぜひアクセスしてみてください。

<http://www.eisai.co.jp/museum/>